群馬大学男女共同参画推進室
まゆだま通信
News Letter
文部科学省　ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業（特色型）
■発行
国立大学法人群馬大学
男女共同参画推進室

〒 371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4-2
TEL:027-220-7146
FAX:027-220-7143
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/

2018.11
vol.18

2018 群馬女性研究者アセンブリー（研究者交流会）を開催

「2018群馬女性研究者アセンブリー」が９月27日（木）に群馬ロイヤルホテルまゆだまの間で開催されました。このアセンブリーは、群馬の女性研究者をはじめとする多様な人材の交流を目指して、男女共同参画推進室と群馬ダイバーシティ推進地域ネットワークが企画した初めての交流会です。当日は69名（男性16名、女性53名、学外者５名含む）が参加しました。

平塚学長からの開会挨拶後、第１部では、保健学研究科教授の嶋田淳子氏による「世界への道⇄女性科学者への道」と題した講演と、平成29年度に「群馬大学女性研究者共同研究促進事業Ａ型」に採択された福島県立医科大学教授の吉田朋美氏、医学系研究科准教授の佐野利恵氏、理工学府助教の潮見幸江氏による成果報告が行われました。続く第２部では、「研究を推進するために必要なこと（もの）／研究を阻害すること（もの）」というトピックで参加者全員がグループに分かれ、KJ法による意見交換を行い発表しました。また、同じ会場で28名の研究者によるポスターセッションも行われました。

事後アンケートでは、「普段交流のない方々との新たな出会いや様々な分野の研究に触れる事ができ、大変有意義だった」、「ロールモデルとなる先生方の発表が大変参考になった」などの意見が多く寄せられ、分野を超えた交流の意義が確認できました。今後も共同研究に繋がるような研究者交流の企画を計画していきたいと思います。

第４回ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク会議開催

平成30年９月27日に各会員機関代表者９名、学内５名、オブザーバー１名（群馬県人権男女・多文化共生課）が出席して、第４回ぐんまダイバーシティ推進地域ネットワーク会議が開催されました。会議ではまず、自己紹介を兼ねて各機関の情報共有事項の説明および各機関の紹介が行われ、それぞれの機関での状況、取り組みに関して活発な質疑応答がなされました。その後、HPの作成状況、シーズ集の現状・協力依頼、群馬県との協力状況が説明され、午後から開催される女性研究者アセンブリーについて紹介されました。来年度以降の会議については幹事機関の持ち回り（事務局は群馬大学）とし、幹事機関またはぐんま男女共同参画センターでの開催が提案されました。開催内容は今後検討する必要がありますが、ネットワーク会議の他、可能な範囲で講演、研究者交流のためのポスター発表、学生交流イベント等が考えられ、参考として「ぐんま学生会議」の様子が紹介されました。

医学系研究科男女共同参画 FD セミナー開催

平成30年10月17日、「群馬大学医学系研究科男女共同参画FDセミナー～医師・研究者のキャリアアップと働き方～」を開催いたしました。まず、医学系研究科長の石崎泰樹先生のOpening remarksで会が開催されました。講演１に、群馬大学医療の質・安全管理学講座教授の小松康宏先生の座長の下、聖路加国際病院統括副院長の松藤凡先生を講師にお招きし、「聖路加国際病院における医師のキャリアアップと働き方改革」と題し、聖路加国際病院の取り組みについてご講演いただきました。講演２に、山梨大学大学院総合研究部医学領域　臨床検査医学講座教授の井上克枝先生を講師にお招きし、「ある医師のキャリア形成」と題し、ご自身のキャリア形成についてご講演いただきました。座長は群馬大学臨床検査医学教授の村上正巳先生にお願いいたしました。両講演とも活発な討論がなされ、最後にclosing remarksとして循環器内科学講座教授の倉林正彦先生に謝辞を述べていただきました。セミナー後のアンケートでは「他院での労働制度について聞く機会がないので貴重なお話をうかがえた」「『働く女性医師を助けるのは男性医師ではなく、その夫』という言葉が印象に残った」「女性医師にフォーカスしすぎない講演で良かった」等と好評を博しました。

大学幹部の皆様との全学ランチミーティング開催

平成30年６月25日、群馬大学昭和キャンパス刀城会館において、男女共同参画推進室が大学幹部の皆様との全学ランチミーティングを開催しました。学長を始めとする役員や昭和地区の学部長等の皆様11名に加え、女性教職員やポスドク、事務補佐員の方々24名が参加しました。男女共同参画担当の本多理事のご挨拶の後、役員の自己紹介、平塚学長の乾杯のご挨拶と続き、その後は軽食をとりながら自由に交流を楽しみました。会場には、新任者や育休中の教職員、３人の赤ちゃんも参加して、和やかな雰囲気の中、研究・教育、業務に関する情報交換や女性の活躍環境の整備、子育て中の方の支援など、学内の男女共同参画の新たな方向性について活発な意見交換が行われました。本ランチミーティングは普段はあまり交流のない役員の皆様と女性教職員や学生が直接会する貴重な機会として、今後も継続していく予定です。

大学幹部FDセミナー
「Beyond the Bias and Barriers無意識のバイアス-Unconscious Bias-と女性活躍促進」開催

平成30年５月17日、男女共同参画学協会連絡会において「無意識のバイアス」のパンフレットを作成された日本大学薬学部薬学研究所上席研究員大坪久子氏をお招きし、女性活躍促進を妨げるUnconscious Biasについて具体的な知見と数多くの事例に基づくご講演を伺いました。大学幹部13名を含む22名が参加しましたが、無意識のバイアスへの大きな意識変革に繋がるセミナーとなりました。

小さな偏見が蓄積されることで大きな差別に繋がることや、だれもが潜在的にバイアスの影響を受けていることがデータで示され、採用・昇進・賞の選考、業績評価において、選ぶ方にも選ばれる方にもその影響があることが指摘されました。また、選ぶ方に女性が加わるだけで、そのバイアスが是正された事例や自己能力を過小評価しがちだった女性がロールモデルを得ることで意識が変わっていく現状が紹介されました。「とても分かりやすく、無意識のバイアスについて豊富なデータに基づくお話は聞いていてなるほどと納得でき理解が深まった」等感想が寄せられ、講演後、学長室において、女性研究者比率20%達成についてもコメントいただき、今後に向けての意見交換も行われました。

ベビーシッター割引券発行事業が直接経費補助へ新たに生まれ変わりました！

群馬大学男女共同参画推進室では、「ベビーシッター割引券発行事業」を見直し、ベビーシッター代の一部を直接補助する制度を実施いたします。

既存の入試・学会託児経費の補助に加えて、お気軽にご利用ください。

＜男女共同参画推進室における託児経費補助制度＞

①休日に行われる**すべての入試時の託児**（非常勤の職員の方にも対応します）
②休日に行われる**すべての学会時の託児**（学会の特設の託児にも対応します）
③平日の**恒常的なベビーシッターの利用時**（どこの事業所でも対応します）

ご利用は簡単！HPをご確認の上、**申請書に必要事項を明記**して、お申し込みください。

ステップ１ 必要書類を添えて申込書を提出 → ステップ２ 審査の後利用許可をお知らせ → ステップ３ 立替払いの後報告書を提出 → ステップ４ 補助額を決定し年度末に振込

柿本社会情報学部長インタビュー　～男女共同参画を語る～

インタビュイー　**柿本　敏克**　社会情報学部長

インタビュアー　**末松美知子**　副学長・男女共同参画推進室員

長安めぐみ　男女共同参画推進室副室長

末松：まず、社会情報学部における男女共同参画の現状についてお聞かせいただけますでしょうか。

柿本：女性教員は、現在３名在籍しています。

末松：在籍比率は１割ですね。長年ずっと増員できなかったこともありますが、人文社会系の割には女性が増えないということが不思議なところです。

柿本：なぜ女性が増えないかと言えば、採用がないということ、それに尽きるのではないでしょうか。最近は、数理系の採用が続いていたのもあります。比率的には女性研究者が少ない領域だと思います。

末松：教育学部は優秀な人を採用したら、結果的に女性が増えていたという素晴らしい状況のようです。社会情報学部も、人が入れ替るチャンスが増えれば、同じような状況になっていくかとは思うのですけれども。

柿本：大学の教員は結局、「個人」の特別な力が認められるところだと思います。先生がおっしゃった例はそうだったのではないでしょうか。同等の力を持っていれば女性を優先的に採用することは、日本の多くの大学でやっていることですし、欧米では普通だと思います。その条件は崩さなくていいと思います。

末松：女性限定ポストをお考えになったことは？

柿本：何としてでも人を採りたいので、優秀な女性に来てもらえるようなポストを学部の将来構想の中に位置付けられるのならば、そのようにしたいですね。

末松：多文化共生や異文化理解のようなグローバル関係の科目は女性も多いので、そのような分野を将来的に広げられるのであれば、女性限定で試みられると。

柿本：学部としてはグローカル地域創生という領域を伸ばしていこうと将来構想委員会で考えていますから、その実現に、女性限定で採用することはありえますね。

末松：学生在籍については男女半々くらいですね。

長安：現在の女子学生の割合は52.6%です。

柿本：伝統的に女子学生の方が活発だと言われます。

末松：確かに。成績を見ると女性が上位ですね。

柿本：真面目に勉強する人が多い。あとは勉強だけでなくて、何かしらで活躍している人が多い。

長安：学生が学部のパンフレットを編集していますね。

柿本：ほぼ毎回リーダーは女性ですね。ただ、リーダーシップを取る女性は性別を超えた存在感があります。

末松：留学も多いですね。以前、オーストラリアへの短期留学研修で参加者全員女子学生だったことがありました。

　では、大学としての男女共同参画やダイバーシティについて学生に関心を持ってもらいたいこと、あるいは大学として進めていくべきこと等、お聞かせください。

柿本：大学は理想的な社会だと思うのです。学生も「個人の能力」で評価される場です。だから、就活をすると急にそうではないことが分かるのですが。ですから、大学は「個人の能力」が評価されるし、能力を伸ばすように育てている社会として、そこでは理想を実現しないといけない。そのためには、男女の区別に基づく差別も含めて、これは気付けるかどうかが大事なのですけれども、―もし何か不当な差別だと思われるものがあったら、―それは是正していくべきだと思いますね。

　議論できるというのは大事なことですね。遠慮なく議論する。実社会だと喧嘩になって利害の対立にまで発展するのですけれども、大学は学問をする場、だからこそ、きちんと議論ができる。

末松：それをできる人間を育てる場、大学として、男女共同参画やダイバーシティを進めていきたいですね。